

日本キリスト教会大阪北教会

2016年8月21日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書12章27～36a節

12:27 「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。 12:28 父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」 12:29 そばにいた群衆は、これを見て、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。 12:30 イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。 12:31 今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。 12:32 わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」 12:33 イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。 12:34 すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」 12:35 イエスは言われた。「光はいましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。 12:36 光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」 イエスはこれらの事を話してから、立ち去って彼らから身を隠された。

《説教》『今こそ、この世が裁かれる時』

◆私たちは毎週礼拝を捧げておりますが、私たち大阪北教会の礼拝順序が定型化しているのを覚えます。冒頭の招詞は詩編第117篇で、これは詩編150篇の中で一番短い詩編であります。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまこととはどこしえにわたしたちを超えて力強い。ハレルヤ。」私達は、すべての国が、主を賛美し、すべての民が、主をほめたたえることを、心から願っております。次に交読文は詩編103篇です。「わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって、聖なる御名をたたえよ。わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。主はあなたの罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してください。慈しみと憐みの冠を授け、長らえる限り良いものに満ち足らせ、鷲のような若さを新たにしてください。」そしてほぼ毎回歌います讚美歌120番は、詩編第23篇が元になった歌詞です。全ユダヤ教徒も、全キリスト者も愛唱して来た詩編23篇であります。私たちが礼拝の始めの部分で、聞き、唱えるこれらの御言葉は架空のものでなくて、多くの信仰者が経験を積み重ねて確認した、神様の真実と恵みを信じ、讃え、感謝する言葉であります。そしてこれらは私たち自身のものであります。そして毎日に私たちは本当にそうなのだということを味わいつつ、本当にそうなのだ、「アーメン」と唱えているわけであります。

◆私たちはこの福音書を続けて読んでおります。回を重ねる毎に奥深さを覚えます。測り知れないものを感じます。今日の箇所12章27節に「今、わたしは心騒ぐ」とあります。これは新共同訳です。「今、

わたしは心騒ぐ。」表現が決まっているようでもあるし、この訳は変だな、という感じがしないでもない。ここは口語訳では「今、わたしは心がさわいでいる」と訳されています。文語訳では、「今、我が心さわぐ」となっています。この文語が捨てきれないで新共同訳は「今、わたしは心騒ぐ」と訳しています。一番直訳で素直なのは新改訳でしょう。「今、わたしの心はさわいでいる。」これが一番良いと思います。

◆ところで、これはイエス様ご自身の言葉なのですが、「今、わたしの心はさわいでいる」というのは、イエス様のどのような心情、状況を表わしているのでしょうか。それで今日の箇所ですが、これは共観福音書によれば、イエス様が弟子達とゲッセマネの園で祈られた、あの箇所に相当するものです。ですから、イエス様はこのように「今、わたしは心騒ぐ」とおっしゃって、この夜、捕えられ、そして俄かな裁判によって、死刑と定められ、翌日午前9時には十字架にかけられておられるのです。その直前のところで、「今、わたしは心騒ぐ」とおっしゃっているわけですが、マルコ福音書14章32節以下にはこうあります。「一同がゲッセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、『わたしが祈っている間、ここに座っていなさい』と言われた。そしてペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。『わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず目を覚ましていなさい。』少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。『アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。』これがマルコ伝の記述であります。それでヨハネ伝の「今、わたしの心は騒いでいる」は、マルコ伝の表現では、「イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。『わたしは死ぬばかりに悲しい。』」主イエスは、正に生きるか死ぬかの瀬戸際に立っておられます。そして、ご自分の生死を通して、ただ父なる神様の御心が行われること、神様のご栄光が現れることをひたすら祈り求めておられるのです。皆さんも今日の箇所は読んで分かる箇所であります。正にここに、イエス様のぎりぎりの恐れ、もだえ、悲しみが現れています。こういうふうマルコ伝が表現しているのを、今日のヨハネ伝は「今、わたしの心は騒いでいる。」と表現しているのであります。12章27節以下にこうあります。「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。12:28父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。『わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。』これが父なる神様のイエス様の祈りに対する御言葉であります。

◆私たちが読んでまいりました11章の初めから12章にかけては、ラザロの死と復活のことが記されております。11章1節以下をもう一度読んでみます。「ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタ村、ベタニアの出身で、ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、『主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです。』と言わせた。イエスはそれを聞いて言われた。『この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。』」このようにあります。ですから

天からの声が「わたしはすでに栄光を現わした」というのは、御子イエス様によるラザロの復活のことを指しています。そして「再び栄光を現わそう」と言われているのは、この後すぐに、イエス様は捕えられ、あくる日の午前9時には十字架にかけられるという急展開になるわけですが、弟子たちは、イエス様から繰り返し「復活」のことを告げられても、そんなことは信じられませんでした。むしろ、ペトロは、イエス様が弱気になっておられると受け止めて、たしなめております。けれどもイエス様のおっしゃる通り、事は展開し、弟子たちは本当に地獄に突き落とされる経験をしました。しかし、イエス様の十字架の死と、死からの復活は、父なる神様の御心なのです。そのようなことでありまして、天から声が「再び栄光を現そう」と言われたのは、主イエス・キリストの復活を指しています。ラザロの復活を通して、多くの人々が、イエス様のなさること、イエス様を通して、人間の思いを超えたラザロの復活に触れて、彼らはイエス様に栄光を帰し、イエス様を遣わされた神に栄光を帰しました。このような次第でありまして、「再びの栄光」とは、主イエス・キリストご自身の復活のことです。

◆先週の愛餐会の時に申しましたが、わたしの下の弟、まだ68歳なのですが、肝臓がんが、既に全身に転移していて、お医者さんから「手の施しようがありません」と告知されました。しかし兄としては、西洋医学でダメなら、東洋医学を駆使して、何とかしてやりたいと思いました。インターネットで調べましたら、これと思う物が3つあり、早速それを取り寄せて弟に飲ませましたら、おいしそうに飲みました。これまで聖書を読んできたわたしたちが捕えられ、わたしたちが信じている主イエス・キリストの神様はこの弟にも善きことを為してくださいに違いない。ラザロの場合、死ぬ前にイエス様は来て下さらなくて死にましたけれども、その後イエス様はラザロを甦らせました。普通には信じ難い話ですね。ところがこの事実に出会った人たちが一杯いたのです。そしてイエス様だけでなく、このイエス様によってよみがえらされたラザロを見るために多くの人々が集まって来ました。この様にラザロを愛し甦らされた御方は、私達の為にも、私達の家族の為にも最善のことを為して下さいます。それがヨハネ伝の証しだと思います。

◆12章31を見ていただきますと「今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」。イエスはご自分がどのような死を遂げるかを示そうとしてこう言われたのである。」ここに、「上げられる」とあるのは、先ず十字架に上げられること。2番目は死人の中からの復活のこと。そして3番目は天の父のもとへの昇天のこと。このような意味合いを込めて、「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」と言っておられるのです。これは、イエス様がこれ迄歩んで来られ、今突き進もうとされている道が、全ての人にとって、そこにこそ神が望まれる真の道があるのだというイエス様の確信を表しています。イエス様はユダヤ人です。31節で「今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される」と言われます。イエス様はユダヤ人です。そして、わたしたちは日本人ですが、神の子であられるイエス様を主として信じております。でもそれはイエス様がどのように生き、どのように死に給うたかということにかかっていると思います。イエス様の独りよがりな確信であれば、イエス様が何と言われようが、人を

自分のもとに引き寄せることはできません。真実がなければ人は離れていきますね。でも、イエス様は、ここで「すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」と言われています。イエス様の伝道に本当に力がなければ一部の人はイエス様を信じるでしょうが「すべての人」を自分のもとへ引き寄せることはできません。

◆34節、「すると、群衆は言葉を返した。『わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その<人の子>はだれのことですか。』」 こういうメシア観が当時あったのです。「メシア」とは、神によって遣わされた者のことですから、こういう反論もそれなりの真実性はあります。ところが、キリスト・メシア・人の子・イエス様は、命を捨て給うメシアです。命を落とすことのないメシアが、命を落とす事によって、命を落とす以外にない我々人間が命を得る。ここに神様の御愛と御心があります。その事を通してイエス様がおっしゃるように、「今こそこの世が裁かれ、今こそこの世の支配者が追放される」ということが起こるのです。つまり、この世のいかなる権威、いかなる支配もその欺瞞性を暴かれる。イエス様の自主的に死を選ばれるその出来事の前で、世の支配者の欺瞞性が暴かれる。本当の救い主であるイエス・キリストを十字架にかけて死刑にする、ローマの権威、ユダヤの権威。かれらが追求し、死守しようとするものは、唯一、真の神様の栄光ではなくて、人間の栄光の追求と死守であることが暴露されるわけです。

◆今日も日曜学校でガリラヤ湖の突風で弟子たちが「溺れて死んでしまいます」と叫んでいる所を読みました。人生の一場面の象徴的な風景であります。船のトモで眠っておられたイエス様が起き上がり、風と波に「静まれ！ 黙れ！」と命じられると、波も嵐も静まった。ですからイエス様がどこの誰であっても、この方が、聖書が証しするような御方でなければ、全ての人を自分のもとに引き寄せると、いくら大言壮語しても、それは空論です。しかし、この御方は、そういう御方であられます。

◆今日の箇所のはじめは、「今、わたしは心騒ぐ」というお言葉でした。イエス様は本当に苦しみ抜かれ、私達の為に身を捧げて下さいました。もし何の苦しみもなく、十字架にかかられたのであれば、私達と無縁の方です。しかし主は、苦しみ、苦しみ抜いて私達の為に、十字架に身を捧げて下さいました。そして主は常に私達と共にいます復活の主であられます。私達の身に、これから何がどういう形でおこるかは、予測はできません。しかし主イエス様が、神様の為さって下さる事は、それが如何なる事であるにもせよ、それらは全て私達にとって善きことであります。そのことを常に信じ、あなたの御心が全ての国の人々の心に届く事を願いながら、これからの日々を過ごしてまいりましょう。

◆お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様

あなたが為さって下さる全ての事は、あなたの善き御心から発している事を覚え、心から感謝いたします。どうかこの身に起こる全て、そして私たちの家族・友人・知人、世界の全て人々に起こる事の中に、あなたの善き御心を覚らせて下さい。そして私たちが互いに思いやりをもって生きる事ができるようにさせて下さい。この祈り主イエス様の御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。